OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜翻刻＞浪華日記行 ： 草案
Author(s)	
Citation	語文. 1953, 9, p. 1-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68433
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

浪華日記行

草案

果報は寐て待ッ子の年に起てうろつくもよしなけれと。安永久年母の色付比。蜜柑金柑の寒気を厭す。十月八日よい日と聞ヶ豊州日田より難波津へ至らん道を求れと。栞なければ其名さへ佐ケ助ル佐介てふ。人を杖とも柱とも。頼む木かけに浅日かけ。はや五ツ半過行ば。荷物とり〳〵我物は。骸斗て渋紙も。笠も銭も家土産も。手拭までも狩衣。苅残したる稲の波。わけつゝ行は大行司。大ヒに行とはきゝなから。足弱車さる事は。思ひもよらぬ所の名。うらやましくも行なやむ。玉来の里に手枕して。休間もなく立出れは。とみに降出ス初時雨。歌や連歌の種なれと。道行袖をぬらしては。身をしる雨に異ならず。さりとては又晴給へと。祈れと悔といや増に。降て湧たる難題にて。跡へも先へも行やらて。一夜の宿を求れと。あるは差合あるは又病人珍客嚊の留主。然らは御免だらけにて。あやしの柴の庵に入。腰打かけて様々の。咄の間に一口號。静に唱ふ称名に主シの心打とけて。最早日も暮此里に。旅宿と申はさむらはす。お泊りならばこなたへと。気を付られていささらは。一夜の御無心申さんと。よぢ登たる四畳敷。折から募る雨の漏。そこには火鉢かしこには。手水盥(タラヒ)て場をふさき。残る所に座をもふけ。琉球芋にてもてなされ。轉枕の貝の上。ひや〳〵かかる雨の漏。こは叶しと捏直る。あたまも暇なか〳〵に。外面かましと篠目の。空を悦ひ沖の石。

乾く間もなき袖袂。しほりながらに立出る。〽十月九日五ツ時。雨も晴れはいそ〳〵と。いそぎや。躓く小石原。更に恋しとおもふ物。梨柿斗店に見へ。又もや難儀柴峠。近道なりとたまされて。めくる羊の腸も。断るゝ計労果。そゐだの町にやう〳〵と。たとりつく息一筋は。青ふ見るがひたるいの。又一筋の溜息か。赤ふ見ゆるはくたひれの。苦は色替てまつかいに。酒にうは気の佐介殿。酔のまきれに人よりも。ましらと詞争ひも。世にめつらしき友千鳥。むりに暇に押籠る。あるじの其名半七を。算用すれば三ツ半に。又一ツ半加へてや。碁好なりけりから衣。又から衣〳〵。打ツや囲むや戦ふやと。夕ま暮より初夜過まて。碁の咄にて後夜近く。所の酒屋へ引連行。これのあるしも橘の。内の内儀はきらひと見へ身を背けてそおはします。扨ここらにも褌を。すかぬおのこや多かんめれ。道におとせしふんぐりと。をぼしき物をお内儀が恥る色なく押こんだ。口の広サに肝潰れ。よく〳〵見れはさにあらて。軒端につるし杜若。菖蒲と見しもことわりや。手読も果て夜食さへ夏の夜ならば尤と。ひたるなからに伏柴のこりよと心戒めても。やはりこのめる道なれば。丹朱を夢に明日は。

〽十日ときけば道の事。おもひやられて明ほのゝ。空も晴行旅の気も。郷の心も香春に出。何ンても一種弁当の。採銅所にて近塩の。肴を得たる徳力に。文作殿を宿にして。先ツ作文を案出す。互違の世なりけり。

〽はや十一日五ツ時。豊前の小倉室町の。筑後やさして入込めば。こはめつらしのまろふとや。何かな馳走清三殿。いと懇なる取持に。べつたりと付ク俳諧師。行脚の労を休めけり。

〽明れば十月十二日。俳祖の忌日といもあして。弔ひ申もおそましながら。

△実不易年〻拝ム帰り花

と打吟し〳〵。近江のかたと志し。暫しぬかつき奉る。同晩雨もいたくふり。つれ〳〵なるまゝ三ツ松に。（三ツ松氏名ハ宗右エ門也）（豊州日田の商人なり）ちよと大阪屋を（大阪や喜七郎小倉にて日田の旅宿場也）訪らひて。船の乗合聞合せ。帰る宿には御命講。法蓮華経鶯の。袖もひらめく女中やら。勿論祖父祖母寄こぞり。供養作善の爨シに。我も合たり叶たり。翁の正当命日の。法事ともまた成なんと。おもひ廻せは有かたく。夜もさら〳〵と明わたり。〽十三日とそ成にけり。扨晴天といさみ立チ。猟船とやら借り受る。

船頭　小倉長浜　養蔵
乗合　飛脚足軽　筑前福岡　浦志源八
　　笹田伝六
　　備前岡山　常右衛門
　　豊後日田町　三松宗右ヱ門

都合其勢第六人おくれし物と乗込て。其夜は凡六七里。漕出し〳〵元山まて。木碇卸夜をあかす。

〽扨十四日晴天にて。風渡たる海つらは。盥のごとく青畳。敷ならべたる座敷のごとく。三田尻ちかく日をくらせば。

〽内ては祝ふ十五日。船ては何も鰌さへ。なか〳〵暑き小六月。室津に船をつなきとめ。陸（クガ）へ上れば風炉のせと。小女郎か招く手に引れ。皆〻浴〻炭の折。木のはし〳〵を洗ひあげ。又乗出して十二里の。道法遠く押舟に。櫓柄も乾き手くすねの。つわの湊に汐かゝり。七ツ比より漣に。つれていさよふ

〽十六日。月よ花よとみたらゐに。昼四ツの比舟とめて。うかれめづらの詠草。昼八ツ時よりはなくりの。瀬戸を追風てすら〳〵と。通りもぬけて行舟の。跡の白波先も又。白波高き灘に出。向を見れば遠山の。高根に沖ル電。幽に轟くいかつちの。次第に近くなりひゝき。今しも頭に落るかと。おそれおのゝく折も折。どつと吹くる風に連。降出す雨は車軸をみだし。帆柱たはみて弓の如く。帆は破レなから矢のごとく。海を臨メは真白き。駒数千疋くたら野に。放てることく波荒く。空を仰ばはたゝ髪。責かけ〳〵なりわたり。天に命をとらるゝ歟。地に叉命を失ふ歟と。乗合共に七転八倒。船頭は猶八転九倒。十転十一当惑して。帆柱立替楫柄に。皆取付し橈もなく。今や沈ムと舟玉を。睨詰(ニラミ)たるだんまつば。笘に喰付泣も在。屋形に顔を差込ンて。念仏申せど声も出ず。只南無〳〵と計にて。二字の名号一字と成り。後は南(ナ)もなく無(ム)もなくて。息たへ〳〵になるも在。此時はかりは義経も。少ハ騒給はんと。騒なからも観念し。生国上妻坂東寺。金毘羅宮ニ一ト年に。二度ヒぬさを奉らん。此急難を即席に。助給へと伏拝ム。手もわな〳〵とふるわれて。生た心地はなかりける。船頭始乗合も。一時はかり一言も。なく〳〵波にたゝよひしが。夜四ツ時分雨も晴レ。風も和らき撫付る。備後の鞆に着ければ。各ほつと溜息を。簗紫の者は西を拝み。東シの者は東シを拝ミ(水主に東西の者在)是仏神の加護なるそと。悦ひの眉開んと。おもひ立てもひそめたる。眉と眉とかからみ合。俄に伸ぬ膝の節。撫さするより外そなき。扨順風になりぬれど。始メにこりて船頭も。しらぬ良にてすこ〳〵と。其夜はともに纜を。結ひ留メてかゝりふね。大紅蓮から引上られ、火燵にあたるもかゝらめと。安堵単懐気もゆるみ

〽十七日とあけぬれば。空も心も晴わたり。力ます〳〵押舟にて。夜五ツ半過る比。世を牛窓に漕付る。此汐かゝりの其内に。きのふの苦痛や残りけん。口中頻にいたみ出シ。夜すから頬を手にかゝへ。独こらゆる四苦八苦。事間

物は船頭の。鼾に通ふ松風の。音に目覚すかこの者。よるの九ツ時分より。追風に連て帆をあくる。八ツの比おひ風つよく。舟は木の葉をちらすかことく。浮つ沈ンつ沈ツ浮ツ。又もや船中騒たち。蘇生して又お迎の。雲やら霧やらわかちなく。海一面に真くらく。七ツの比にも成ぬれば。又帆柱を立替て。やうやく四合三合の。帆もあるなしの命乞。水田天満ツ御ン神に。是より三年懈怠なく。月参とそ立願す。斯て猶更口中の。いたみもつのり風つのり。播磨灘へと走り行。船はいさむと見ゆれとも。乗込てゐる人々は。心苦心労須磨の浦。あれそと見やる当にて。漸波も静まれは。

〽十八日四ツ時分。飯少しつゝ味わひて。聊我は人也と。おもふ心そ付たりける。けふはきのふに打替り。空も晴るれと気味わるく。又もやお風か替らんかと。おそろしほしく海山を。見たいとおもへど顔か出す。ここは名所とちと首を。出しては引ツこめ〳〵。甲を干たる石亀の。犬に骸をなめらるゝも。斯やとおもひ合せたり。扨とやかくと押送り。昼七ツ比兵庫に着。過こし道の法(ノリ)とへば。三十八里一息に。乗つゝけしと語るにそ。さらばことわりおそろしき。波風も立ツべかんめれと。楫を横たへ帆を畳み。しはらくいこゐ又候や。十里の渡シさら〳〵と。又も追風に大阪の。川口に入り何事も。中島のかた湊橋。好キに好ミのたはこやの。長兵衛殿を尋行。宿を極めて乗合の。客にそれ〳〵暇乞。筑前筑後豊後の国。別〳〵になりふりも。笹にみたけし髪結の。床めつらしき難波津に。やとる心そうれしけれ。

〽斯て十月十九日。天気晴快ほの〳〵と。廿年来踏も見ぬ。仙場をこへて島の内。八幡筋に名も高き。豊竹二代の駒太夫。俗名播磨屋藤右衛門と。尋当し家の結構。昔に増りて富栄へ。紙商売を第一に。丸一香の油蠟燭。髪の飾の小間物類。所せきまてならへたる。簞笥の金具きら〳〵と。光かゝやく七光。親の仕置と見へなから。二代のさかへ

いみしくて。目を驚かし一言も。中戸の内へ這ヒいれば。亭主駒太は昂然と。毛蒲團の上あくらかき。右に置たる大火鉢。左に定規煙草盆。向に内儀お道のまへ。三両二歩のきせるを取リ。煙草吸付差出せば。おつ取直して飲込ムつら。なか〳〵麁相な大名は。よりもつかさる栄耀也。むさんなるかな福松は。ながの旅路に着破りし。羽織の裏もきれつゝれ。下着の裳も中綿か。顕れ出る田舎もの。駒太もそれと見ぬふりも。千の字の紋めつらしと。互の挨拶ヲロシも済ミ。茶の間へあかればお道のまへ。是はいかなる風来人。箒木ぐらひちやいにやせまい。杓子摺小木建ならへ。はや追出さん眼つき。奇麗な良に在付かね。恰も一輪咲初の。牡丹の花に熊蜂の。二疋とまりし良付には。永居の程もおそろしく。袖より大栗取出し。おみやけなりと差出せば。扨珍物哉〳〵。丹波の爺打嘆打も斯はあらしとふいちやうし。受納の躰に落付て。廿年来かいつまむ。昔咄にお内儀も。扨はと心打替り。目元も少し引汐に。なりふりまてもしとやかに。詞をかけてとめらるれば。さらは滞留いたさんと。馴染の二階に攀登り。舟の労を一睡の夢に預て休らひぬ。やゝ程過て目も覚れば。こだみは忍ひまかりしゆへ日数の滞留なりかたしと。かたればあるじ眉を立テ。せめて二年敷三年敷滞留ならては叶ふまし。さらは芝居の芝の芽も。萌出る春もあらなんと。思ヒの外の事なめり。残念ばらし気ばらしに。曾根崎芝居へいさまからん。心得たりと行侍るに。座本は竹本染太夫。太夫は豊竹駒太夫。同矢太夫計にて。外には名ある太夫なし。番場忠太三の切。口取豊竹矢太夫ニ奥は則駒太夫評判あしく取はやし。鱧買やらん敷を。はよかやらんかと言ふるる。誹りを餘所にすこ〳〵と。元の楼に立帰りぬ。

○ 十月廿日

誓文ばれやらはれぬやら。亭主は常よりとくおきて。いまたに親父存命なら。嘸々悦ひ楽まん。親父に逢せ参らせ

んと。寺へもふてゝ奥深き。墓所に一礼三拝す。釈の豊駒と成給ふ。四年の昔おもはれて。涙をうかめ立帰りぬ。中村阿契病気と聞キ。即見廻侍りしに。昔に替らぬ作文の。物かたり抔言捨て。名残を惜み立別れぬ。最早七十以上の大病。明日の命もはかられね。浅田一鳥黒蔵主。松洛共に故人となる。浪華三蔵無事なるよし。未対面の折を得す。扨周防町幾竹や。芸名豊竹島太夫。格子に掲し六和膏の。看板たゝき訪ふに。これは六十九歳にて。少シも衰ふ気色なく。終つぶよみの音曲すら。声鮮に節委敷。自慢の入レ袖高慢の壓口。若き者にも勝りけり。或時ひそかに申さるゝは。趣向山崎与次兵衛にて。新作一部たべかしと。望にまかせ受がいて。其夜は元の木綿町。豊駒かたへ立帰りぬ。

○　十月廿一日

堀江市ノ側の座本豊竹此太夫を尋しに。住める所は岩田町。銭や佐吉と相替らす。無事を宝と咄合。只悦ふ事限なし。咄の山々飛こへて。三国志にて大坂陣。一作所望と申により。先は受かい置侍りぬ。折から作者貞蔵子。参り合て知音となる。家業はくすしと見へなから。匕を此道に投たりけめ。それより高瀬甚蔵殿。（会所役人也）鍛冶屋町まて訪ひしに。昔の内儀は世をさりて。今の内儀は顔見しらす。入我我入の挨拶にて。其日はそこの酒食にふけり。又もや元の木綿町。豊駒宅へ立帰る。

○　十月廿二日

角の芝居に中村富。見物せんと思ひ立チ。豊竹島太にいさなはれ。芝居へまかり侍りしに。昔の行平磯馴松。鍛冶の太郎七中山文。女房則富十郎。四段目小藤も富十郎。汲汐又々富十郎。七十三の其働き。咲出す花に今脱ケし。蝴蝶の遊戯るるも。斯やと計見まかひぬ。古今独歩の名人ゆへ。入も大入場も賑ひ。数年の鬱気を失ひぬ。

○ 十月廿三日

堀江の芝居市の側。新物也とてまかりしに。稲荷街道墨染桜。第三の詰此太夫。四五年来の大当り。第五に梅川忠兵衛。八重太古今の大出来にて。田舎の土のへはりつく。耳をこそげて立帰りぬ。

○ 十月廿四日

道頓堀なる竹本の。芝居に罷侍りしに。お染久松歌祭文。作文数度の煎しかへ。味ひもぬけて古めかしく。太夫に声なし節もなし。漸三の切迄見。油屋の段跡にして。すこ〳〵宿へ立帰りぬ。

○ 十月廿五日

なんば新地にしるよしして。京や平次郎殿尋ねしに。日からなりとて伴ひて。天満参詣企ぬ。難波橋にも至りしかば。平次も風雅の一人にて。即興一句と望まるゝ。詞の下に五六艘。炭つめる舟の通ふを見て。

〳〵美敷手や見ん舟の炭表（註。〳〵は原本朱書。表は、原本のまま。表は俵の略字か）

とつゝり合て見せ侍りぬ。偖神前に礼拝して。あたりを見れは時なるかな。近キ比なる回録にて。仮社にそおはします。茶屋にてたべ物しつらひて。帰の道を踏かへて、北皮屋町旧国てふ。風人の戸を扣キしに。他行なりとて方角も。彼鳳の字もたいなしに。空敷ク宿へ立帰りぬ。

○ 十月廿六日

毎日あるきくたひれて。此日は宿に侍りしに。旧国大和屋宗次と名乗。とむらひ来ツて閑談す。其後四十五六の男。衣服も常の模様にて。いかにも常の人来り。懸河の弁説便々たり。我も負しと受こたへ。月雪花の言の葉に。且妙な

るあり奇なるあり。聞人心耳をすますもおかし。駒太も席に居侍れば。そも此人は何ン人と。問ば豊駒大に笑ひ。今まて懇意懇切の。御物語はむつましく。誰とは存ししられすや。あれこそ近松半二公と。聞て扨はと驚く内。半二も我を誰そと問ふ。又も豊駒大に笑ひ。扨は互に見忘て歟。此まろふとは福松氏。東助公にておはすといふ。此講釈に近松も。又福松も猿松と。替る姿を恥けらし。それより半二か宅へ行ク。所は三ツ寺風炉屋のあたり。へつついやとはおもひきや。半二あれは女房あり。女房あればよき娘。ありて只。親父となつたりけり。半二徐に語て曰。一向太夫に太夫なく。返て素人に名人あり。されば作文無益となりぬ。さりとも当冬竹本の。芝居の作者に狩とられ。漸四百め拂にて。年中弐貫四百めなれは。なんぼふ無念の給銀なり。しかし足下と同行せは。声律節章構ひなく。文章計て繁昌させ。芝居再興せんすならば。本懐たらんと悦ひぬ。斯て旅宿へ帰りしに。竹本政太京より来。京物語の始終を聞。頻に所望すといへとも。曾根崎芝居に約あれは。いつれ再会〳〵と。渠は京へそ登りける。

○ 十月廿七日

けふしは北の新地へ出。染太に熟談せんものと。大和橋なる人を（朝日山といふ角力取）尋ね。曾根崎中町大丸にて。そんじよそこらと指さゝれ。染太か宅に入やいなや。栗の土産をいかめしく。三年以来文通の。間違咄に心もとけ。渠も笑我も笑。物喰茶飲ム半ニ曰。こだみ滞留成かたくば。御本を残し置るへし。只今梓に鏤置。一字一点違ひなく。披露の上にて節章は。聞人朱にて書入へしと。誤入たる頼により。近日免も角成行へし。駒太と談し給へと答へ。夫レより芝居へ入つるに。染太行平三之切。声はなけれと面白く。面白けれと入はなし。一切見果て中の島たはこやへ行夜を明しぬ。

○　十月廿八日

八幡筋へ立帰り。二階によちていねたりしに。駒太代ゞ旦那とする。炭屋町の炭屋なる。善兵衛殿と申仁。大有徳にて紙商売。或は質屋かねかしにて。身上あげて考へかたし。福松氏へ一飯を。ふるまはんとの使を受。駒太連立まかりしに。あるしこよのふ打悦び。親の善兵衛親駒太。此世にあらは嘸かしと。昔をしたひ今は猶。いと懇なる饗なり。時に豊島や新右ヱ門殿。鑑屋周次郎殿も出会し。一座の望にしたかひて。千歳萩の序切迄。少シ計の本読す。扨色々の馳走の内。骨ぬき鯛の引物に。新清水の茶碗蒸。初鮪汁うにこのわた。蕨蒲鉾いふもさら。平に〳〵と強られて。たらふく松とたべ尽し。更闌に立帰る。

○　十月廿九日

天気もほからかならされば。寝たり起たりおもやせて。新作文に刻意せり。折に銀鹿かけ来り。只今堀江さるかたへ。まかり給へと猶豫なく。使と共に出て行。とある揚屋を窺へば。炭善豊駒桓々と。藝子二人を翼にし。舞諷ふなる酒宴の座。ヤレ待かねしこなたへと。招く尾花を踏わけて。通る座敷は錦織。花野のごとくなまめかし。時に炭善申さるゝは。貴公連々藝子好。只今大坂数千の内。一二を争ふ大名人。お元てふ者呼置けり。此藝聞せん為なりと。則お元を招かるれは。出現ましますお元の君。年比三十前後と見へ。器量は十人並ミならす。扨三味を継歌一ツ。弾ならしつゝ吟すれば。梁上の塵飛ちつて。座敷に花降り異香薫し。焼鯛も鱗を立。鉢を飛出る妙音。許由か耳の垢を楊貴妃にとらせ。琥珀の油て洗ふかごとく。言語に絶たる名人。二天は勿論一天未曾有の女なりけり。時に福松察然として。哥一ツにて二ツと乞ず。此合ヒの手に豊駒も。琴責なんとつゞしれは。彼女も又琴責をかたる。声色節章僻

までも。恰も駒太に彷彿たり。扨しも今夜は是限りと。延たる興を縮れば。おもと殆驚歎し。此客田舎と見へなから。心は都はつかしゝ。哥一ツにて退くとは。今まて人に交る内。かゝる事しもあらされば。いてや弾へし諷ふへしと。引つゝけ〳〵。四ツ敷五ツ敷調へたり。始の藝子両人は。三味を横たへ口を閉。踧踖如たる有様は。いかにもさらめ三味もうたも。万里を阻ツ其夜も。いたくふけ〳〵〳〵。風か当ればよい気味と。霜やら雪やら白髪あたま。てんとたまらぬ八幡筋。肘播磨屋へ立帰りぬ。

○ 十一月朔日

きのふの栄花咲残る。二日宵から寝た時より。とく起上りぶら〳〵と。なんばの京平とむらひて。迎酒なと汲替す。一河流にうかれめの。情商ふ家なれば。店には女なまめかしく。予か名を福松唐人毛と。皆聞違へていぶかしく。唐人毛といふいはれを問フ。実ニそれにこそ口伝あれ。我生国は筑後にて。長崎の津を隣とす。されば唐人紅毛に。知人のごとく交れば。彼国々の言の葉を。しれるかゆへに予か名とす。全躰からには毛を尊ミ。関羽は錦の袋につゝみ。遊女の玉門淋敷には。他毛を以て付髪す。此理によつて某が。鼻毛両三孔外に出ツ。是獣漢の徳ありとて。唐人毛とは申也。扨は唐人紅毛の。行状きかんとこそりよる。心得たりと出来合の。唐音流るゝ水の如し。かれら毎晩責問ゆへ。後は外国四夷八蛮。猩々鸚鵡のむつごとまて。言なくりてそ楽しみぬ。

○ 十一月二日

生玉もふて思ひ立チ。高瀬の何某誘ひて。高津黒焼屋のあたり。応律てふ人尋ねしに。昔に替る詫住居。お信御前も蔽膝襠。かけかまひなき女夫口。世から捨られたる捨人。廿年来あら〳〵と。物かたる間に応律曰。僕は貴国の

羽林公。毎月白米五斗づゝの。恵を受て世を渡れり。然れは取訳交りの。深からん事希ふと。夕飯比より立別レ。又生玉を経めくりて。菜飯田楽イヤ出るが。苦になりますと戯れて。高瀬諸共立帰りぬ。

○ 十一月三日

師走忘レも肝心の。師走過てはいな物ゆへ。仕損しなんもほゐなければ。けふしいとなみ申さんと。炭善豊駒三人連。道頓堀にうかれ出。西や東と吟(サマ)へば。二階〳〵に藝子のうた。師走〳〵と沢山そふに。いふてたもんな銭かね遣ひ。遊へ〳〵と弾かくる。調子に乗て舞込茶屋。妓子(ケイコ)両人呼よせて。酒宴数刻に及ひしに。夜五ツ比坂町の。三味重次郎か室つより。うかれめなんと呼集め。酒興半ハに座を見れば。下着の裳の切レ間より。つゝれし綿の落たるを。我物なれとしかすかに。手にもとられぬ小夜衣の。ふるきかゆへとあきらめて。跡は笑と成にけり

○ 十一月四日

右の連中生玉の。西照庵にまからんと。約束変して豊駒と。天王寺もふて道すから。以来大坂住宅の。相談町々見物して。蘇鉄屋へより茶をもらゐ。咽を湿して立帰る。

○ 十一月五日

岡野源一七才子。河原町なる一丁め。南横町住宅と。聞たをたより訪ひしに。源一欵喜踊躍して。作をとゝまり医を学べと。頻にすゝめ申やう。某当年六十一。医者弟子凡五十人。其内独も器量なし。甲斐徳本の秘書十巻。譲道へき頼なし。幸貴公を千里にして。得たるは天の賜ゆえ。是に酬ヒて書を譲らんと。弟子帳面に名をとゝめ。医道の論に日をくらし。木綿町へそ立帰りぬ。

○ 十一月六日

曾根崎芝居も味噌になり。なんとせうゆに塩梅を。仕替て新タに興行と。相談極り染太夫。京物語を懇望す。頭取吉田貫蔵に。手代分には鈴やの弥兵衛。矢太夫名八（駒太夫三絃引也）寄来ル。軍勢駒太の座敷を囲ひ。京物語をよめと乞。則全部読終れば。座中手を打声を揚。当時の名作末代の。調宝也ともてはやす。扨こそ今度は新物と。相談央（ナカバ）決せしに。駒太江府へまかるに付。座本の染太申やう。福松氏の顔見世に。太夫なくてはいかゝなり。作の善悪構なく。繁昌せぬも有事也。まづことわりと極りぬ。手代座中の面々は。打より〳〵今一応。新作上るり興行の。相談日々に混雑せり。

○ 十一月七日

けふは神道専らと。座摩に稲荷に本願寺も。拝めくりて行末は。財津氏なるくすしに逢。国の用談あらましみて。蘭尺宗匠とむらひしに。あやしの住居乏敷たづき。見るめいふせく立かへりぬ。同晩駒太饗応にて。中の顔見世見んものと。駒太夫婦に下女一人。藝子のお元呼出し。九番の桟敷によちのぼる。狂言外題モヲよかろ。牛の腸上中下。取わけ肝を冷しは。彼山下の金作也。十とせ餘りの江戸くたり。めつらにふとくたくましく。肥ふとりたる美しさ。顔から手足物こし迄。全愛敬だらけにて。汁気絶たるおばゝても。尺八もときの長涎。よめや娘は涎より。外に流るゝいさら川。きものゝ裳へ行水の。果白波とや成ぬらん。かゝるひゐきの諸見物。よいや親玉うまい事。ありがたいてはほめたらす。只山猿の啼ごとく。キツ〳〵〳〵と叫ひ出し。泣より外の事そなき。此面白さに酒肴。種々のもてなし重れと。くふやらのむやらわかちなく。只打見とれ暁の。鐘と鶏とに手を引れ。なこりも鴛の水離れ。又大坂の

縁あれと。皆打連て帰らるゝ。心の内そいたはしき。

○ 十一月八日

昼四ツ比まて打臥て。面白くたひれくつたりと。北条五代記読始め。発心桜の趣向を立る。

○ 十一月九日

朝より昼迄北条記。熟覧終て或人の。すゝめに随ひ忽然と。都登を思立チ。中の島にて船に乗。夜五ツ比漕出す。船中寒風するとくて。笘を吹上帆をまくる。七嶋霜深く。鞠窮屈に夜を明せは。よふ〳〵淀のあたりなり。

○ 十一月十日

朝五ツ比伏見へ着。水菜ぜんまい豆腐にて。飯二三盃きこしめし。稲荷大佛八坂の塔。祇園清水参詣して。八ツの比ほひ四条に出。和泉式部の芝居にて。竹本政太に出會し。夫レより京都の太夫元。伊東又右衛門殿の妾宅。蛸薬師通り河原町。南へ入丁奥深き。井筒屋おさよ様の内。爰そと立よりゆる〳〵と。休息の内日も暮れば。政太に市太（市太郎三味線の名人也）訪ひ来り。京物語読侍るに。三絃市太すゝみ出。一別以来廿年。此道修行の功積り。人丸なんとにくらふれば。百年千年万年の。御鍛錬とも申さんと。厚く賞する詞の尾に。取付人々一同に。千祝楽とそいはゝるゝ。其悦にくたひれて。夜食もいや〳〵三盃食ヒ。毛蒲団敷てそいねたりけり。

○ 十一月十一日

未明に食事たらふくたべ。ふつと北野に詣しに。常は神さひ森々と。能の追出揚弓場。焼餅屋にて腰をかけ。菜飯田楽したゝめて。島原一見立戻り。又一二軒見廻りて。両本願寺をつと〳〵に。拝とゝけるお真向様。広大無辺の堂

塔に。仏法繁昌思ひやり。摂待所にて息を継。六条五条四条に帰り。政太か旅宿御幸町。六角通り下り丁。井筒屋平兵衛殿を尋ね。本の事なと談ぜしに。又千歳萩読侍ルに。諸人猶更感心す。あすは鎧の渡と望む。其時少〻自慢を出し。イヤ〳〵最早止るへし。千巻よんても善也美也。いつれをいつれと御所望の。相談一決すましとて。暇乞してこよひしも。伊東の宅に一宿せり。

○ 十一月十二日

先ツ大坂迄かへらんと。伊東や政太に約をなし。京物かたり千歳萩。所望めさらば三日の内。返答あれと言残し。彼妾宅を立出しに。駕籠代として弐朱弐ツ。忝とちやくふくして。又もや祇園に吟ひて。聞及たる噲々堂。京下川原竹酔館。表の門に聯二枚〳〵我酒天下本無両只是臭銅十二銭と。竹に彫込ム揚酒屋。内へはいれば六畳敷。中央に炉を切明て。床に掛物額を打。いと風流なる住居也。亭主は名にあふ佐貞吉。俗名富田屋彦四郎。噲々堂と名乗かけ。瓢々然と座に直る。鬢髪さばらに風に乱れ。着物まはらに垢むして。奇々怪々の噲々堂。近比病にかゝるよし。評判高キ出来合の。新唐音も黙然と。愚なるがごとき容貌にて、取付島に酒弐合。所望に随ひ立上り。炉に炭を継火をおこし。釜には錫の罐を入レ。罐の口にぜうごをはめ。ぜうごの中に羽二重の。水嚢五ツ重ね立テ。上より酒を波流せば。五重の羽二重脱出。罐に通ふあたゝめ酒。しつほく臺に乗せにけり。臺の上には大土器。それに莨蒻もりこぼし。朝鮮薇の箸を打。其側に唐焼の。器にいれしは縮緬ざこ。萩の折箸取添て。小皿は粉にせる番椒。たんぴゃうより外何もなし。扨蠟石の盃にて。独汲干す其内に。詩歌連句の咄になり。あるしも少し快く。詩一首書て差出す。予も孕句なとしたゝめて。下僕拝スと名を印す。噲々発句を再吟して。彼出来合の唐音を一口二口轉れば心得たりと

こなたより終出来合の唐音を戸板に豆を蒔出すことくはらり〳〵とつらぬれば本家大に恐レ入善哉々々真実の唐人来迎ましませしと口をつくんで謙る（傍線ノ部分ハ原本墨ノ棒線ニテ抹消）国所を聞所在を問フ。生国あらましいつくと答へ。業は不庭の遊民と。実三虚七に告ケしらす。坊主や医者の来りしを。立汐にして門前の。柳をわかね立別レ。いで空腹を養んと。大仏前の茶屋により。支度終れは雨ばら〳〵。あはてふためき霜月の。日も呉竹の伏見なる。大仏屋より舟にのる。例の押合へし合にて。十三日の暁に。漸浪花に着岸す。

○ 十一月十三日

駒太所へ立帰り。きのふけふ見た京物語。長ふ短ふ咄わけ。其日も暮て周防町。島太の翁に出合しに。本一冊を授らる。作者は享保年中にて。趣向は山崎与次兵衛也。一句一章取所は。紙のよきより外になし。島太莞爾と打笑ひ。よくば今まて書蔵にて。年を経へきにあらされば。あしかりなんと挨拶す。殆御同意仕る。昔も下手は多かりきと。本を其座て差返し。又のごけんと立帰りぬ。

○ 十一月十四日

十六日より帰郷と極め。土産物なと買あるき。町中にして日をくらす。なんば新地の大根ンの。そのふろふきか六文つゝ。飯六文と十弐文。飢を凌て帰らるゝ。御ン儉約そびんなけれ。

○ 十一月十五日

いさかへんなん帰らんと。船の有りなしきかんため。中の島へと行道筋。新町の阿波座のあたりにて。庄兵衛てふ太夫に逢ヒ。互に恂りくらへして。しはし詞もなかりしか。彼者喟然と歎して曰。貴老は日田に滞在と。思ひの外の

向顔なり。成程日田へ在なから。将門流儀穴賢と。おもへば三輪と伊勢の神。御縁次第と立別れ。彼煙草屋に一宿す。

○ 十一月十六日

昼より島の内へ帰り。大宝寺町何丁めか。金田屋久七殿へ参り。万事万端談せしに。先ツ此節はあらましに。手付を取て作文を売付給ふ事なかれと。異見に随ひ胸をすへ。それからあなた金田やにて。悠々然と夜をあかす。

○ 十一月十七日

更に京都の便なく。否の返答あれかしと。手紙を出して発心さくら。筋書あら〳〵したゝめて。ふとおもひ付キ文蔵へ。三味の古糸貰受。駒太に拍子扇をもらゐ。国の土産と直しけり。

○ 十一月十八日

しばしの別惜まんと。染太を尋ね名八を問。是にも三味の糸を乞。夫レより天満に参詣し。あまんの植木屋見めくりて。落咄や追出シに。日を盗まれて暮かたに。又々元の木綿町。駒太所へ立帰る。

○ 十一月十九日

買物あら〳〵取しらべ。帰国の用意なす折から。京より手紙到来す。早速ひらき閲するに。千歳萩を売切にて金千疋と望よし。駒太大キに怒をなし。政太が肝煎行届かす。先ツ二千疋極まり也。最早此上万疋ても。遣しかたしと返答あれ。実尤と返事を出す。扨こそ京都も変約す。帰国の土産如何と談ず。駒太金子を取出し。京物語鎧渡価十両其手付円金弐両渡すへし。千歳萩としやかたら文是又代金拾両にて。手付に千疋又弐歩は。此太頼の手付分。都合に五

両差出す。相談熟して本四冊。駒太に預ケ手付金五両受取侍りぬ。別の砌駒太申は（コノ七字原本ハ行間ニ書入レ）何れ来年七月より慥に登り給へかし。自分は当冬江戸へ出。来四月には帰宅せん。手前に座本組立て。七月比より興行せん。尤初年の御給銀。先ツ三〆めと思召せ。行末いさをし次第ぞと。万事相談整て。島太手付は金百疋。諸方の土産押いたゝき。銭弐貫文かり衣の。袂にいれて立出れば。駒太大キに打笑ひ。昔に替る御有様。袖の銭こそつらからめ。人してもたせ給はんかと。夕暮近く成りぬれば。其返答も中島の。船宿さして立出る。船聞合せ帰りかけ。久七殿に立よれば。ひしこのにしめ塩梅よく。一飯たべて又元の八幡筋へ立帰る。

○ 十一月廿一日

駒太の家内暇乞。亭主を始内儀迄。手代の吉兵衛真空坊（堺の棯太夫入道シテ仕フ）同久兵衛下女おふぢ。同おさつ久三すら。なこりを惜み来年の。道近かれと門送（クリ）。嬉し悲しさ行別れ。金田やさして行ければ。久七殿のおせゝにて。不足の買物取しらへ。荷物をからけ船中の。食物までも気を配り。いと懇なる取持に。其夜はそこにとゝまりぬ。

○ 十一月廿二日

偖金田やにて何事も。仕廻へば用も中の島。たはこやさして急き行。船の乗込明日と。決着の上又もとの。金田屋にこそ立帰る。

○ 十一月廿三日

昼過発足久七殿。御父子が荷物かつき合。中の島迄門送。至て懇意の振廻に。こなたも腹臓涙にくれ。別をなしてたはこやの座敷に時を見合する。はや乗汐といかめしき。水主に引かれ舟にのる。

船頭小倉　三右衛門

十二反帆　住吉丸

乗合

小倉家中　大阪留主居
隠居　百束儀左衛門殿

筑前芦屋　俵屋徳右衛門

同人下人　助五郎

法花宗　小倉
小僧　嶺学

小倉　足軽
鳥方役人　長井伴七

皆ミ知音に成にけり。時に嶺学申さるゝは。我々船に乗込ムより今日迄はや十七日。順風テなくして滞留せり。貴公は今より乗始メ仕合なりとほのめかす。扨は気毒其うらかせ。追付さら〳〵吹出さんと。何角に草臥すや〳〵と。簀板の上に熟睡す。

○　十一月廿四日

よく晴天にはなりけれと。東北の風少もなく。からろの音も鯵川へ。道十四五丁押出す。

○　十一月廿五日

けふも晴天凪日和。夜明前より押舟にて。七ツ時分は兵庫に着キ。岬の御宮清盛の。廟所に参りて汐を待チ。同晩

七ツ舟を出す。

○ 十一月廿六日

同じく晴天風もよく。播广灘すら静にて。国も治まる抔といひそふな日和にて。赤石の前へ出ぬる比。ふと風替り波あらく。灘四五里にて時移り。やうやく七ツ半時分。室の前にそかゝりける。

○ 十一月廿七日

又もや晴天べた凪にて。舟押出せは徐に。西風おこってまぎり舟。二三里運ひ赤穂に着キ。藻汐たくなる塩野の木屋。わぶと答ん有様は。古哥よりも猶いふせくて。詠物には面白し。城下に出れは有かたき。花岳寺中の忠義塚。皆〻ぬかつき拝をなし。すゝろに涙をうなかしぬ。風も替れば立戻り。昼七ツより舟を出し。其夜は世をは牛窓に。汐かゝりして夜もすから。舟が走れは鍋までたきり。寝てゐる心も飛立ことく。遽々然として時ならぬ。蝴蝶の夢や結ひけん。

○ 十一月廿八日

晴天風なく五ツの比。下津井により風炉に入。諸方見物ゆる〳〵と。昼七ツより舟を出し。三四里過て夜五ツ。せみのどふにて汐をよけ。夜の七ツに舟を出ス。

○ 十一月廿九日

又も晴天朝五ツ。風西になり出帆せず。鞆の湊に逗留す。船中乗合望にて。

天満宮に東北の風を乞んと筆を採。

風のこち来たと悦ぶ千鳥かな

斯なん申シ終る比。そろり〳〵と風替り。東へ廻り北へ吹ク。船頭殊外悦び。遍照小町と尊敬す。晴なる場所に天然と。かゝる生姜の喰合。あるにかいなき舟の内。あたら発句の手からやと。笑ひながらに夜を明す。

○ 十一月卅日

晴天風凪押舟にて。六ツ半比より鞆を出る。八ツ過比にはなくりの。瀬戸の無難を悦ひぬ。夕ま暮より北するとく。夜にいれは猶吹募り。舟の行事行さるがことし。夜の四ツ比かこ幸介。綱取外し入水する。舟中大に立騒き。四五人手々に引揚て。からき命を助たり。連中悦び限なく。祝直しの発句を乞。こゝは狂歌の場所ならんと。やたて取間もなくよめる。

〽四方寒く骸は波にいつきなだ。幸助あくる幸助

とつゝり侍りぬ。所はいつき灘のよし。至極の寒夜に溺れたる。をのこの名をは幸介と。いえれば斯そよみ侍る。かゝる其間も順ン風か。いやましに吹募る付ケ。夜七ツ時上の関。一寸と立よる船頭か。買物済んて油断なく。帆を引ツかけて走らする。

○ 十二月朔日

舟走りつゝけにて。名にしあふ周防灘にかゝる。鯨の汐吹けるを見。水押の崩れたる。舟などに行合。夜五ツ時迄に。三十五里の灘一息に。下の関にぞ着侍りぬ。雨風の催も侍るに。其難もなくやす〳〵と。着岸祝の酒なと汲ム。夜五ツより雨降出す。

○ 十二月二日

昨夜より降つゝけ。終日ス止ます。あしやの客も別をなし。再会を期し関へあがる。夜に入て淋敷サの余り。若僧船頭法問争ヒ。取扱て一笑し。同し所に夜をあかす。

○ 十二月三日

とふやらこふやら晴天になる。明の六ツより関を出。五ツ半頃小倉に著キ。相替らす筑後屋の。清三良殿へ参り。互の無事を悦ひぬ。扨第一の用なりと。日田の　旦那へ書状を出す。はや暮かゝる空くらく。又もや雨に降込メられ。大阪みやけとせがまれて。京物語の読ものみする。鴨の吸物酒肴。夜食も済て寝間に入り。一寝入して口中いたみ。又々難儀千万也。

○ 十二月四日

漸晴天朝五ツ。小倉の町を立出る。清三良殿門送り。扨市右衛門といふ人に。荷物かつかせ供につれ。上の原にて腹ふとめ。日も暮かたまてたと〳〵と。木屋の瀬にこそ着にけれ。旅宿は綿屋又兵衛殿。極丁寧なる人物にて。心打とけ風炉に入り。六里のくたひれ保養せり。

○ 十二月五日

又々晴天明ケ六ツ立チ。ふと道中にて踏たがへ。さなきたに行なやむのに。難行苦行重りて。道はかとらす七ツ過。飯塚にこそ着侍れ。旅宿は肥前屋喜市郎殿。同宿の客打よりて。いろ〳〵咄の半バより藝州の客進出。我レ針術の名人也。即席快気なさしめんと。予か足をひらき又ちゝめつ。二針三針打やいなや。前十倍のいたみとなり。拠な

く通シ馬。ひそかに雇ひ召し連し。人は小倉へ返しけり。

○　十二月六日

朝六ツ比に立出る。道より大雪降出し。御座一枚にて身を纏ふ。馬かた殿は日笠もなく。軒の雪にはあらねとも。首筋元にひや〳〵〳〵。あまりに凌きかたくてや。村へ立より酒をたべ。折を見合せ又馬に。乗ればいよ〳〵雪つよく。悲しさの餘りたはむれて。いかに馬かた殿に申すへき事の候。そもいかなる事と答ふ。汝此雪面白きや。イヤ面白きとは愚の事。悲しさ骨身にこたふと答ふ。さらは今降ル雪を留メ。とく晴天になさしめんと申せば馬かたあざわらひ。さる事あらは世の中は。太平楽と成ぬへし。片腹いたき御諚かなと。鉢巻引締轉りけり。其時某鞍笠に。御座の袂を刷ひ。ヤヲレ馬かた慥に聞ケ。我俳諧に身をこらし。思惟する事廿年。つもる修行の宿徳にて。奇あり妙あり怪ある事。いてやあらわし見すへしと。宰府のかたを伏拝み。又遙拝(フシ)ミ〳〵〳〵

〳〵降レとこそ乞へきに乞雪の晴とつらね終れは風も止ミ。空の曇も打はれて。日もあさやかに照渡れば。馬かた大キに驚入ル。其馬かたより一番に。先ツ自身にぞ驚けり。こは犬の歯の蚤の味。うまい〳〵と打うなづき。ひや水峠に休らひしに。馬かたは目も飛あがり。鬼神のことく尊敬す。強飯吸物昼食たべ。山家打過七ツ過。松崎に着キ大崎や。新八殿に一宿す。

○　十二月七日

朝五ツ時松崎を。跡に見捨て府中迄。馬にてうたせとくとゝき。梅屋へ立より荷を預け。それより独とぼ〳〵と。かちたちになりあゆまるゝ。八ツさかりともおぼしき比。忠見村迄着キ待れば。妻子は無事を打悦び。みやけもかな

と見めくれど。なにそ一物身に添ず。とこへいたやらいかぬやら。しるもしらぬもより集り。帰国をよろこぶ斗也。

安永九庚子歳臘月初七　筆をとゝむ

不知火州速水郷

珍重庵

下

璞

此一冊上るり作文のつきにも拵らへ立よとある　大人の望にまかせ風雅の罪の重なるをも顧見すよしなし事をあら〳〵つゝり立たる恥かしさに珍重庵下璞とこそ申候　穴賢〳〵